

## 『トリウム原子炉——古川和男・ヒロシマからの出発』の著者として

長瀬 隆

<http://homepage2.nifty.com/~t-nagase/>

私長瀬隆は1931年の日本領樺太（現サハリン）の生まれでして、早稲田大学露文科の卒業、83歳です。長く旧ソ連関係（貿易その他）の仕事に従事、1983年に樺太を主題とした最初の長編の小説作品『樺太よ遠く孤独な』を発表。現在までに三冊の小説、一冊の翻訳、二冊のロシア関連の評論もしくは学術的研究ともいふべきものがあり、雑誌に連載したものを含めれば八冊目となる本を昨2014年8月に出しました。『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』であります。

広島と長崎に投下されわが国では大本営の発表により新型爆弾と称されてきたものの真の名称を私が見つけたのは、ソ連占領下の生活に入って二か月たって、再開された中学校に於いてでした。一人の物理の教師が核分裂の原理を教え、マッチ箱一つの大きさの爆弾の破壊力について述べ、第三次世界大戦は不可能になった、君たちの任務は平和で文化的な日本を建設することにある、と説きました。

この人が私での人生での最初の先生であったとすれば、引揚げて北海道の高校から進学した早大で遇った松尾隆教授は二番目の先生でした。戦前、木寺黎二のペンネームによる『ドストエフスキー文献考』を始めとするロシア文学の業績で知られたのですが、戦後は本名に帰り、平和運動に力を注ぎました。持病の心筋梗塞のために1956年に49歳で死去。この人との縁で翌1957年私は日本原水協の訪ソ使節団にロシア語要員とし加えられています。そしてその延長として1959年にウィーンで行われた世界青年学生平和友好フェスティバルというものに参加したのですが、この日本からの団に日本被団協の代表として出されていた辛島和子と翌年結婚することになりました。

彼女は広島でたまたまそこに滞在していて被曝したものであり、生まれ育ちは大分市でして古川和男さんとはごく近所に住み幼馴染だったのです。もっとも古川家は戦後ほどなく大分市を去って京都に移り、彼女は同家のその後の消息を知らなかったのですが、1988年に弟の雅章さんが夫人を伴って拙宅に見えました。この時私は氏の口から兄上の和男氏がトリウム熔融塩炉なるものを研究しており、それがいかなる事故に際しても放射能を放出せず安全であること、FUJIの名で完成していることを伺ったのです。雅章さんはその後も娘さんを伴って見えたとのことですが、私はソ連に出張中でお会いしませんでした。

1986年ソ連の白ロシアのチェルノブイリで原発事故があり、放射能除去に動員されたエストニア青年たちに放射線による障害が発生、私が所属する平和事務所に救援を求めてきました。1990年青年の一人と診察に当たった病院長を広島大の原爆医学研究所に送る仕事に従事、翌91年同共和国からの招待でバルト三国を訪ね、リトアニアではチェルノブイリと同型の原子炉を見学しました。病院長とは日本とバルトでよく付き合ったのですが、その人は「ソ連のようなずさんな国だから事故は起きたのであって、日本を含む発達した資本主義国では起きない」と保障してくれまして、私はその言葉に影響されました。またリトアニアの原発のロシア人所长が具体的に数字を挙げて、原発なしではリトアニアの経済が成り立たないことの説明を受け、これを信じた節があります。こうして1999年に雅章さんに案内されるようにして、和男氏が拙宅に見えた時には、私はトリウム熔融塩炉については半信半疑でした。所用があったので「どうぞごゆっくり」と申し上げて外出したのですが、もしも関心があったならば、お話を伺おうとしたでしょう。そうしなかったのは私自身が「安全神話」に毒されていたためだったのかもしれない。和男氏はトリウム熔融塩炉について、ただそれだけにつて熱弁をふるわれたようです。二年後の2001年『「原発」革命』が文春新書の一冊として出、妻は贈呈されていましたが、私は彼女から薦められても読もうとはしなかったのです。

わが妻はたまたま滞在していた広島で爆心地から1・3キロ地点の木造家屋の二階にあって被爆、爆風に吹き飛ばされて地面に転落、気絶から醒め、河を歩いて渡り、指示に従って戸坂村（現安佐南区）まで歩き、国民学校（小学校）の校舎に収容されました。両手足に火傷があり、髪は全部抜け落ち顔の皮膚は一度つると剥け落ち、火傷と打撲のために翌朝からは起立不能でその地に長く留まり、11月になって実父に背負われ海路大分市に帰っております。数年後健康が回復して大分県庁に勤務、1954年のビキニ被曝による乗組員久保山愛吉氏の焼津での葬儀には労組から出されて出席。また1956年長崎で行われた第二回の原水爆禁止世界大会には大分原水協の会員として参加、そこで成された日本被団協の結成に参画、大分被団協の初代の事務局長になりました。私と結婚したとはいっても、最初の子はファロー四兆症という心臓に欠陥をもって生まれ、1967年に四歳十か月で死亡しております。また彼女自身も1984年に連続して両乳房および左の腎臓をがんのために摘出され、人工透析の生活に入りま

した。古川和男さんのトリウム熔融塩炉には関心の薄かった私でしたが、以上の諸事実は1989年の『ヒロシマまでの長い道』および1996年『微笑の沈黙』の二冊の小説に書き記しております。

『桜の園』の作家チャーホフは1891年にサハリンに至り『サハリン島』を著わし、そのなかで間宮林蔵を島であることの最初の発見者として挙げ、「サハリンを最初に発見したのは疑いもなく日本人であり、日本人が最初に南半分を領有したのである」と記しました。このチャーホフの正しい見解はシーボルトの大著『日本』に依拠したものなのですが、実はこの『日本』が1854年の露訳された際、政府の検閲によって意図的に削除されていたものを、チャーホフが正しく訂正したものでした。この発見に基づき私は2003年に『日露領土紛争の根源』を上梓しております。

原水爆禁止の運動に私を導いた松尾隆教授はマルクス主義者にしてドストエフスキー学者だった人でした。その仕事を引き継ぐようにして私は1989年にペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』を全訳刊行していました。またその延長として2008年には私自身の執筆になる『ドストエフスキーとは何か』を公刊しております。こうして私は2011年東日本大震災を迎えたのです。

私が古川学に目覚めたのは福島事故後5月に刊行された『原発安全革命』を読んでであります。入院中ですぐにはお会いできず、退院されて9月5日シアターテレビの討論番組「やらまいか」に出演された折、テレビ局でこれを傍聴、終了後の食事会にも出させてもらいました。その直後の私学会館での講演会には当日の台風、および翌日の家内の透析クリニックへの送りのために欠席を余儀なくされ（後にDVDを視聴）しましたが、10月のITHEMSの例会と同月最後の品川の集会には出席、週刊金曜日掲載の「原発はウランを止めてトリウムを」のゲラ刷りが出来ていたのでお渡ししました（後に手紙を添えて雑誌を送付）。12月の筑波での葬儀にも参列させてもらっております。

私はまだソ連占領下の樺太にあった14歳の年から樺太について書かねばならない、と覚えてきました。また妻との出会いと結婚後は、ヒロシマに到着したと意識が生まれ、年数を要しましたが樺太の小説本を出した後に、彼女との出会いをテーマとして『ヒロシマまでの長い道』を書きました。そしてフクシマ後古川さんにお会いし、「みなさん地球を救いましょう」の肉声をお聞きして、私の妻への到着は実は古川和男への到着でもあったことに気づいた次第です。また実際にお会いしたのは1999年になってではあっても、それよりもずっと以前にお会いしていた（可能性がある）と思うことになりました。

1959年ウィーンに向かうシベリア鉄道の車中で、私は座席で彼女と向かい合って対しているうちに、両手と胸の襟元の火傷がひどいのに顔が無傷であることを不思議に思い、「顔には傷はなかったのですか」と尋ね、彼女は答えています。その模様をそれから30年たった年に公刊した作品のなかでそのまま次のように記しています。（→次頁）

氏とのフクシマ後の再会の後、私はこの三人のなかに氏はいたのではなかろうかと思うことになり、年が明けたら大磯のお宅に伺いそのことを確かめようと思っていて、その機会を永久に失っていました。それで彼女に直接尋ねることになったのですが、「居たとも居なかったとも言えない」という返事でした。驚くべきことにこの記述とは異なって彼女は見舞客たちに対して顔を上げずに俯いたきりで相對し一言もいわなかったのです。少年たちがいたたまれずに逃げ帰ったはずなのです。

私は真相を明らかにすべく、同席した可能性のある方に電話しました。間違いなく居たはずであると信じられた一人でしたがすこし前に亡くなっていて、夫人としか話すことができず、そのひとの助言で電話した人も、探し回ったが一人も該当者は居なかったとのことでした。従って和男氏が原爆後4か月の彼女の顔も上げえぬ惨状を見ていたかどうかは定かではないのです。しかし私は「見ていた」と仮定することにしました。そうするとトリウム熔融塩炉学者としての氏の人生がまことに語りやすくなるからでした。



「大分に帰りましてね」と彼女は始めたろう。「噂を聞いてすぐに小学校の同級の男子が三人見舞いに来てくれたんです。ところがわたしの状態があんなにひどいとは思っていなかったのですね」

大分に帰った彼女の髪の長さは、戦後髪を伸ばしはじめたであろう男子の友だちのそれよりも短かったろう。顔の腫れの回復の程度もさることながら、一度はすっかり剥げ落ちたというその皮膚が完全にもとの状態に戻っていたはずはなかったろう。訪ねてきた男友だちはお化けのようなかつての女友だちを見たと思われる。

「わたしを一度見るなり顔を背け、その後は互いに顔を見合わせて話し、ちらりとまたわたしを見てはすぐに顔を背けるのです。とうとう逃げだすようにして帰っていったのですが、その姿の可笑しかったこと」と彼女は真に可笑しそうに口に手を当てて笑ったろう。

ど肝を抜かれるような話であり、実際彼はど肝を抜かれたのである。彼女が男友だちが去ったのちに泣かなかつたはずはなからうと彼は思ったろう。見られる者も見るとともに大変だったのである。だがそれから一四年目が経過していて、ウィーンのと平和集会に向かう列車のなかの彼女は微笑んで話していた。デュラスの女主人公の憤激とは無縁であるかのように、それは彼女の表情には認められなかったのである。

敗戦時、氏は熊本の第五高等学校の生徒で勤労働員に明け暮れていました。栄養不足のために衰弱し、動員先の医療施設に収容され、空襲警報が鳴っても自力で待避できずに伏せていた、と記しています。当時九州南部では沖縄を制圧した米軍の次の上陸地点は宮崎県の海岸と想定されていて、戦争が原爆によって終了しなかったならば、自分は「死んでいた」と記しています。原爆こそが「救い主」であったとすれば、それによる犠牲者たちには「恩義がある」というのが古川さんの考え方でした。それは私の妻あての年賀状にも肉筆で記されています。

氏が拙宅にみえた 1999 年から数年私は『早稲田 1950 年資料と証言』という戦後の学生運動を総括する季刊雑誌への執筆と編集に従事していました。また 2001 年は京都大の 1951 年のいわゆる「天皇行幸事件」の 50 周年の記念行事に先立って東京で前夜祭的行事をやりたいという依頼に応じ、早大の呼びかけによるシンポジウム主催、私はその記録集を編集制作しました。天皇の行幸に対し、同学会（全学自治会）が天皇の戦争責任を問う質問状を総長に託し、「平和の歌」を歌って迎えたという「事件」でした。またその前年同大は日本で最初の原爆展を京都駅に近いデパートで行っています。氏が京大大学院の化学科に在学中の出来事で氏はこの空気と無縁だったはずはなく、それは東北大の金属研に移ってからのロンドン大のバナール教授のもとへの留学に窺えます。

バナールはジョリオ・キュリーの後をついで世界平和評議会の議長になった人でマルクス主義科学史家であり、同評議会は朝鮮（戦争）での原爆使用に反対してストックホルム・アピールを発しています。先に挙げた松尾隆の日本平和委員会はこれと密接な関係にありました。古川さんはバナールを生涯

にわたって師と呼んでいました。米オークリッジ研究所のトリウム熔融塩炉の研究を学術誌で知り、それを己の生涯の課題と決めたのは1959年と記していますが、これはロンドン留学中のことと推察されます。

氏はトリウム熔融塩炉の三大長所の第一にそれが熔融塩を媒体とすることを挙げています。発明者である米オークリッジ研究所とワインバーグに対する敬意、また自身が化学者であるためと思われる。氏は、大分は県国東半島の先端の佐賀関に在った精錬所の所長の嫡男で幼少から父君の仕事を継ぐものと思っていたと見られ、そのためもあってトリウムではなく熔融塩を第一に置いたと思われます。しかし古川和男の存在を思想史的に捉えようとするとき、トリウムこそが第一に置かれるべきであったと私は考え拙著ではこれを第一に置きました。すなわち氏は初発からウランとプルトニウムに反対でトリウムを選んでおり、それを氏の広島と長崎に対する格別な思いのためとしたのです。

アインシュタインは無神論者でしたが、19世紀ロシアの作家ドストエフスキーの長編小説『カラマーゾフの兄弟』を高く評価していました。これには「著者より」と題された序文がありまして、そこでは主人公が「奇人」であることが予告されています。「時代全体の核を自らの中に蔵している」にもかかわらず、「ある風の吹きまわしによって」同時代人全部によって「背を向けられる」奇人について述べているのです。キリストを念頭においてのものなのですが、これは古川さんに当てはまることでもあります。「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きの中で、ときに不当な扱いを受けることがある」と記しており、講演では地球と人類の救済を強く説いていたわけですから、私の連想は見当違いではありません。

古川さんが蒙った「不当な」運命は米国でワインバーグが蒙ったものの延長でした。すなわち米国内で挫折せしめられたものを継承発展させFUJIとして完成させたのでして、この時、若かった氏は、米国で陽の目を見なかったトリウム熔融塩炉も日本であるならば受け入れられると思っていた節があります。実際それは1981年には「トリウム・エネルギー学術委員会」の発足、「自民党トリウム利用推進議員懇話会」の発足があり、根拠のない期待ではありませんでした。しかし米国におけると同様にプルトニウムを欲していた政治勢力によって隠微な形で潰されました。

日本では実現できると古川さんが信じたのは、広島と長崎の体験を有する国だからであって、これはワインバーグその人も同様だったと思われます。ウラン原発の跳梁跋扈をゲーテの『ファウスト』を引き合いにして「悪魔との取引」と見なし、自身これに責任があると感じ憂鬱症に陥ったこの人は、1991年広島と長崎を訪ね、深刻な宗教的な体験をしました。帰国後オークリッジ市を動かし広島平和公園内のものと同型、ただし大きさ重量ともに三倍のもの鐘を日本のメーカーに発注。International Bellと命名されたこの名には古川和男との友情が含まれています。1994年の自著《The First Nuclear Era》にそうした記述はありませんが、それはこの鐘が在郷軍人の団体らによる猛反対に遭ってこの時まだ屋外ではなく市庁舎のホールに留め置かれ、著書の目的の一つにこの鐘を屋外の公園に移すことができ、日本への屈服と解されかねない言葉は避けるべきだったからです。後にこれは晴れて公園に据えられることになり、拙著の裏表紙には木下幹康さん撮影になるこの写真を飾らせてもらいました。

1954年ビキニ環礁における漁船の被爆を契機として澎湃として起こった原水禁の署名運動、その発展としての日本原水協および姉妹団体としての日本被団協の発足は、まことに国民的な規模のものであり、日本の歴史においてのみならず世界史的にも画期的な出来事でした。これとほとんど踵を接するように行われた「原子力の平和利用」の美名のもとに行われた米国主導・日本一部保守勢力積極協力のウラン原発輸出入には、この運動が掲げていた全面完全な核軍事化反対を押しつぶす意図が秘められていました。

日本学術会議の物理学部門は湯川秀樹・朝永振一郎を中心に拙速な輸入に強く反対し、これに業を煮やした中曽根康弘を中心とした勢力は第二学術会議的団体を発足せしめ、これに賛成の答申をさせ、ウラン原発を強行しました。私たち夫婦の年来の友人である物理学者の大槻義彦氏がそのホームページで明らかにしていますが、それによると、同時並行的に政府の強引な後押しで諸大学に設けられた原子工学科には物理学者は参加せず（排除され）、電気科その他の隣接諸学科から人がかき集められ、御用学科として発足したということです。そうした学科の出身者たちが「安全、安全」と高唱し、フクシマで一時シュンとしたものの、安倍政権の発足によって息を吹き返し、「自然界に完全な安全などない」などとうそぶき、ウラン原発の再稼働を目指しているのも、出自がそのようなものだったからでしょう。

問題は核兵器・核拡散反対運動と脱原発の運動です。フクシマ後、前者のなかでは反核には熱心だったが原発には関心が薄く不十分にしか提携してこなかったと反省する声が聞かれます。両者は互いに対立しないまでも別々に運動してきたのです。それでは両者が鞏固に提携し、ウラン＝プルトニウム原発の体制を打破するにはどうしたらよいのでしょうか。両者は提携しなければならず、しかしそのためには

媒介する契機が必要です。古川和男のトリウム熔融塩炉こそはまさにそれだったのであり、これだけがこの要件を満たすものであることを。私たちは声を大にして言わねばなりません。

いわゆる原発ムラにも古川和男トリウム熔融塩炉の掛け値なしの長所に気づいた人はいました。その代表的一人に東電副社長だった豊田正敏氏がおります。古川さんと会談したこともあるこの人はかなり早くからトリウムの長所に気づいていたと思われ、まだフクシマ以前の自著のなかでトリウムの採用を提案していました。そしてそれを本年3月15日の朝日朝刊の「私の視点」で繰り返しました。わがITMSFの吉岡律夫さんはこの提案を取り上げ通信0187において仔細に検討されています。すなわち、公表されている米国の実験結果ではプルトニウムは七割に減少するだけで文字どおり「50歩100歩」である。「固体Th燃料は魅力的ではある。しかし再処理しないとその魅力は十分ではない」。再処理が必要となるが、これは商業ベースには合わない。「豊田氏は「70歩よりは50歩の方がよい」という考えのようです」と批判的です。

フクシマ後『原発安全革命』によって眼から鱗が何枚も落ちる気持ちを味わって、私は数年内に古川和男さんのFUJIは実現されるだろうと予想しました。しかしそれはそうならなかっただけではなく、自民党安倍内閣の成立によって状況は変わりました。その直後病床から電話によるインタビューに「こんな日本では死んでも死にきれない」（この表題で『新潮45』に掲載）と応え、亡くなった人に私も面交際があった作家・詩人の辻井喬さんがいました。本名は堤清二、西武デパートの所有者である経済人でもあった方です。しかしその後の事態は悪化の一路をたどり、古川学に障害を作り出しています。この間日本にいったい何が起こったのでしょうか。

『原発安全革命』は科学技術の本ですが、古川さんは関連する政治・社会・文化・宗教問題にまで言及していて、それらは断片的ではありますが、非常に鋭くかつ適確でして、思想書の性格を有しており、示唆するところ多大です。

戦争は儲かる仕事であり、戦時中に巨大化した米国における産軍政複合体は、戦争が終わったからといって解散するわけにはゆかず、存続し続けようとしたことが冷戦の原因でありました。TVC総裁として自分の管轄下にあったオークリッジの農業地帯に国家機密の施設がつけられ、当のリリエンソールがその目的が原爆の開発であったことを知ったのは、一般人同様それが広島に投下された翌日だったと伝えられます。このことから彼は原子力の利用には秘密主義がつきまとい、民主主義が圧迫されることに警告を發しました。ウラン原発の危険性を見抜き、彼は性急な輸出に反対しており、しかしそれは、ワインバーグのトリウム熔融塩炉の研究開発を潰したのと同じ勢力によって強行されました。

リリエンソールは初代原子力委員長の地位を追われながら、新しい科学技術が社会になじむには年月が必要とされてきた歴史的な事実を立て、己が生きた時代を前原子力時代と呼びました。あたかもこれを受けてのように、ワインバーグはその自伝に『最初の核時代』の名を選びました。第二の真の時代が到来し、トリウム熔融塩炉が実現することを信じたからでして、結びに「残念なのは私がそれを見ることがないことだ」と記し、事実見ることなく亡くなりました。

古川和男が日本で被った運命はワインバーグのそれと同質であって、FUJIの実現のために努力しつつ、晩年には日本での実現は諦めていた節があります。最後の年の講演・対談にバカの罵言凶悪な言葉が目立つのですが、それは原発ムラに浴びせられたものでした。死なねば治らぬバカを指していたのですが、フクシマから四年を経過して実感されるのは、このバカは死んでも直らない不死身のバカであることです。このバカは原発の導入当時すでにそれによって得られるプルトニウムを、将来の日本の、たとえいわゆる「抑止力」のためであるとしても、核武装に利用しようと目論んでいた存在です。

米国は日本の独自核武装を許しませんから、この秘められた目的はまさに秘められたものであって公言されたことはありません。しかし歴代の経産省幹部には伝達されてきたのであって、その証拠に若手の官僚で高速増殖炉もんじゅが多額の資金を浪費するだけの錬金術であることを正当にも指摘し、その継続に異議を唱えたものは左遷されています。もんじゅはプルトニウム蓄積の対米の隠れ蓑なのでして、彼らはもんじゅを死守してきており、今後もまさに文字どおり死ぬまで守るのです。とするならばこの凶悪な悪魔、悪霊であるところのバカは、たとえ先に述べた豊田正敏の提案程度のものであっても、許容し採用するはずがありません。

固体のウランに対し、これも固体のトリウムをミックスした炉の場合は再処理が必用となり、それには熔融塩に頼る以外にありません。すなわち現行のウラン炉を生かそうとするならばその内部に小型のトリウム熔融塩炉を設置することによるプルトニウムの全面処理のほうが手っとり速い。こうしてフクシマ後の今日、木下幹康さんはこの複合のReactorをRinRと命名し、提案しました。素晴らしいアイデアであり、拙著はこの出現に間に合ったので、これを冒頭の章で紹介して執筆に入りました。しかし日本で実用化される気配は無いようです。プルトニウム消滅などとてもない、というわけです。

これに加えて、今日までの核燃料サイクルに巨大な融資を行ってきている金融界が、その融資金の回収のためにも現行炉の継続を望んでいることが挙げられます。現行の核燃料サイクルの終焉は、日本資本主義の終焉に繋がると怖れています。

古川和男がトリウム熔融塩炉の長所として挙げていたものの三つの最後の一つは炉の小型化でした。木下さんはこれをさらに推し進めて超小型の熔融塩 (Fluoride) 炉であることをもって F3R と命名した炉を提案しました。拙著の公刊後のことで間に合わず収録できませんでしたが、TTS は日本には見切りをつけこれらを国外で実現しようとしております。

国外には、自身ウラン原子炉を所有しつつ、日本のようにプルトニウムに執着せず、それを無用かつ有害なものとして生産せず消去したい国々があります。トリウムの語がスカンジナビア神話で雷神を意味するノルウェイがその一つです。かつまたこの国は NATO に加盟せず、同じスカンジナビアの隣国スウェーデンとの合意により、ノーベル賞のうちの平和賞をうけています。かつて米ブッシュ政権の中東侵攻に反対した国連事務総長エルバラダイ (エジプト) に対し、同賞を与えたことを始め、自主的国際平和外交の歴史を有する国。この国のハルデンにはパリに本部をおく OECD の実験用原子炉があり、ハルデンプロジェクトと呼ばれていますが、木下さんが述べたように TTS は 3 月 23 日に現地において委託契約を結びました。最初は RinR を続いて F3R を実用化する、と聞いております。

古川和男さんは自分の立つ位置を「第三の道」と呼んでいました。しかし古川さん自身がしばしば例として挙げてきたようにかつてアフリカのガボンに天然の核分裂が存在しており、核分裂によるエネルギーの取得は自然なエネルギーの取得と見なされるべきであります。トリウム熔融塩炉は脱・反原発 (実情はウラン軽水炉) とは提携できますが、ウラン-プルトニウム原発とは敵対する路線です。

このことは現憲法をめぐる論議に視点を移すともっと明瞭になります。脱・反派が憲法の九条を擁護するのに対し、ウラン-プルトニウム派は改正を目指しています。古川さんは著書のうちで「世界に冠たる平和憲法」と明確に述べており、FUJI はその思想の体现であります。TTS の RinR および F3R の路線はその延長であり、九条の世界化であり、今日イギリス、スウェーデン、ドイツ (EUROATOM)、デンマーク、チェコとの国際共同プロジェクトを目指しております。

憲法「改正」と同時並行的に進められている自衛隊法の「改正」は、ウラン原発再稼働との関連でいえば、対外用であるよりは、対内用であるように思われます。沖縄辺野古での基地建設を「粛々」と進めるためには、反対運動を自衛隊によって武力鎮圧せざるをえなくなるでしょう。同様に本土における原発再稼働には反対する地元住民の武力弾圧が必用でしょう。「日本人の生命と安全を守る」などと高言しておりますが、ウラン原発は全国土を裸の容易な標的に変える試みでありました。日本は防御できる国ではなく、全世界的な核拡散の防止、究極的には廃絶こそが平和と安全の保障であり、トリウム熔融塩炉こそが、戦争の原因である貧困の根絶を促すのです。古川さんがその著に「革命」の語を冠したのは、ただ単に狭い意味での科学技術の上でのそれを指したのではなく、地球・世界・人類的規模での精神革命を目指してのことでした。

